

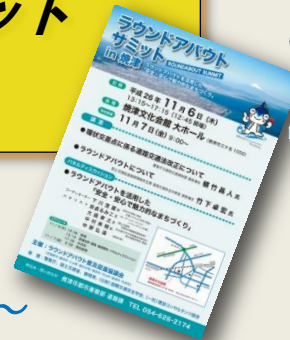


ラウンドアバウトサミット in 焼津（概要）



～ラウンドアバウトを活用した

「安全・安心で魅力的なまちづくり」～



日時：平成 26 年 11 月 6 日（木）13 時 15 分～17 時 15 分

場所：焼津文化会館 大ホール、関方交差点

欧米などで交通事故の減少などの導入効果が報告されているラウンドアバウトは、平成 25 年 6 月の道路交通法改正により、国内でも環状交差点として位置付けられ、今後の本格的な整備が期待されているところであります。

このようなことから、趣旨に賛同する全国の市町が結束し、様々な知見を持つ学識経験者の方々と整備事例、課題、効果の共有を図りながら、その有効性の発信を行うことを目的として開催しました。当日は講演やパネルディスカッション、基調報告、現地視察を行い、市民をはじめ全国の行政関係者や学識経験者、企業関係者や学生など約 1,000 人の方々に参加をいただきました。

講演



演目「環状交差点に係る道路交通法改正について」

講師 警察庁交通局交通規制課課長補佐

植竹 昌人 氏



演目「ラウンドアバウトについて」

講師 国土交通省道路局環境安全課道路交通安全対策室課長補佐

竹下 卓宏 氏

基調報告

飯田市（糸原建設部長）、安曇野市（飯森都市建設部長）

須坂市（奥原まちづくり推進部長）、矢吹町（小椋都市計画係長）

焼津市（寺尾都市基盤部長）

パネルディスカッション

テーマ：ラウンドアバウトを活用した「安全・安心で魅力的なまちづくり」

論点1. 地域住民や利用者という視点からまちづくりを考える

論点2. 少子高齢化などに対する将来社会の視点からまちづくりを考える

○コーディネーター



日本大学理工学部
交通システム工学科教授

下川 澄雄 氏

○パネリスト



モータージャーナリスト
ノンフィクション作家

岩貞 るみこ 氏



国土交通省中部地方整備局
道路部長

大庭 孝之 氏



名古屋大学大学院環境学研究科
都市環境学専攻教授

中村 英樹 氏



焼津市長

中野 弘道

現 地 視 察

場所：関方交差点 11月7日（金曜日） 9時00分～11時30分

開 演

普及促進協議会会長挨拶



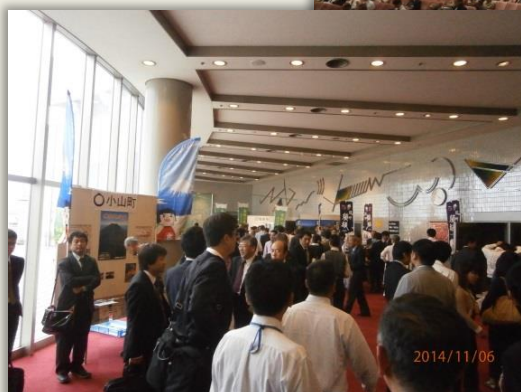
飯田市佐藤健副市長

開催市挨拶



中野弘道焼津市長

北は北海道、南は沖縄まで全国各地
からご来場いただきました。



協議会参加市町による物産販売が
行われ会場は大いに賑わいました。

講演



植竹 昌人氏



環状交差点の標識

テーマ：「環状交差点に係る道路交通法改正について」

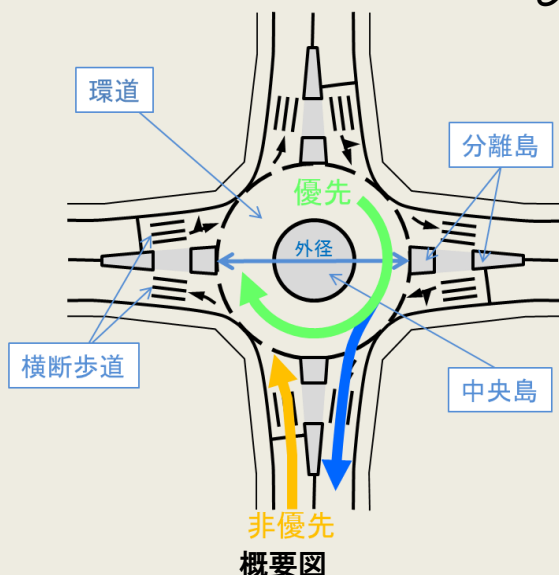
従来のラウンドアバウトに適用されていた道路交通法はT字交差点の集合体であることから、一時停止、指定方向外進行禁止及び一方通行規制が設けられていたが、改正後は環状交差点の位置付けにより一つの交差点とみなすことが出来るようになったことや、逆走、環道優先妨害、方向指示器による合図についてそれぞれ違反時の罰則規定があるとの説明がありました。また、通行時には環道を走行する車と、環道に進入しようとする車のドライバーが、共にアイコンタクトを利用することで、安全で円滑に通行することができるとの説明がありました。



竹下 卓宏氏

テーマ：「ラウンドアバウトについて」

ラウンドアバウトの適用条件は大きく分けて「交通量」及び「幾何構造」の二つの項目により判断する必要があるとの説明があり、留意事項として歩行者交通量、自転車交通量が多い交差点では、ラウンドアバウトの交通容量が大きく低下する可能性があるため、導入の可否を十分に検討する必要があることの説明がありました。



基 調 報 告

安曇野市、飯田市、須坂市、矢吹町、焼津市の順でラウンドアバウトの導入・検討状況を報告しました。



安曇野市 飯森正敏都市建設部長



矢吹町 都市建設課
小椋 勲 都市建設係長



飯田市 糸原和代建設部長



焼津市 寺尾隆之都市基盤部長



須坂市 奥原利広まちづくり推進部長

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、ラウンドアバウトを活用した「安全・安心で魅力的なまちづくり」をテーマに、議論が行なわれました。議論の内容は以下のとおりです。



☆コーディネーター
日本大学理工学部 下川澄雄 教授



パネラー
モータージャーナリスト ノンフィクション作家 岩貞氏



パネラー 名古屋大学大学院環境学研究科
中村英樹 教授



パネラー 国土交通省中部地方整備局
大庭孝之 道路部長



中野弘道 焼津市長

概 要（主な意見）

ラウンドアバウトの社会実験は、様々な意味で地域のまちづくりのきっかけ、動機づけが芽生えたものであり、市民が改めて交通と安全・安心で魅力的なまちづくりについて、考える機会となった。また行政、地域住民、企業技術者、研究者が相互補完により連携し困難な課題を克服しながら造りあげたラウンドアバウトを今後は、ユーザーがどのように使い、使いこなしていくかが大事である。

ラウンドアバウトでも事故は発生する。その事故の原因が何であるのか、どのようにしたら防げたのか考え、ユーザーや地域で育てていくことが大事である。また、PDCA サイクルにより、より良いラウンドアバウトに育て、使いながら改良していくことが大事である。

車の性能が向上していく現代において、ユーザーは車の性能に過度に依存した運転をしている。交通ルールの基本中の基本を再度見つめ直し、交通社会のレベルをもう一步ステップアップする好機である。ラウンドアバウトはまさにきっかけ付けを与えている。非優先、優先の関係を今一度確かめることができ、相手を思いやる通行は“譲り合い社会”のきっかけとなる。

相手を思いやる気持ちがあってこそ日本の交通ルールでありまちづくりに繋がっていく。

少子高齢化社会において持続可能な地域や街をどのように造っていくか、広い視点で街を考えていく新たな視点が必要であり、国交省が提唱している「国土のグランドデザイン2050」では、コンパクト&ネットワークにより一つの街はコンパクトになり、その街と街をネットワークで結び連携していく。

コンパクトに集約した生活拠点内の道路は、速度を抑制させて安全対策を図り、魅力的な街並みを形成する。また、生活拠点間の連絡道路（ネットワーク）は、短時間に移動が出来て信号機の少ない道路が必要となる（立体交差やラウンドアバウト）。

拠点間の比較的高速移動が可能な道路と、速度抑制された生活道路とのメリハリにより、安全性の向上、地域の魅力向上、災害に強い地域の構築にも寄与できる。その中でラウンドアバウトの役割は、集落や住宅地などの入口（出口）の境界部に設置することで道路の違いを把握させる（メリハリを付ける）。集落や市街地中心部、商店街出入り口に設置（中心市街地活性化）。

また、生活道路の速度抑制デバイスとして設置、観光地への出入り口でのシンボルゲート機能としての設置が考えられる。

パネルディスカッションでは、ラウンドアバウトが果たす役割として、交通安全対策や災害対策における有効性以外にも一つのまちづくりとして、様々な役割を担うことが出来ることなどラウンドアバウトの有効性が大いに発信できたものと考えています。

現 地 視 察

関方交差点での現地視察には、市民、行政関係者、企業関係者などに参加をいただき、平成 26 年 1 月に実施した関方ラウンドアバウトの社会実験の概要や通行状況、今後の整備計画について説明を行いました。

